

日本エッセイスト・クラブ

2022 冬

NO.74-II

会報

第12回応募エッセー特集



日本エッセイスト・クラブ

会報

2022 冬

題字 阿部 眞之助
表紙 よしだみどり
カット

目次

応募エッセー特集

2

会員近況・自著紹介

17

事務局から

20

日本エッセイスト・クラブ定款

21

会員名

23

応募エッセー特集

今秋、広く会員の皆さまのエッセーを募集したところ、5編の作品が寄せられました。会員のエッセー募集は、当クラブ創設60周年記念で初めて行われて以来、今年で12回目です。本会報には、今回応募の全作品を掲載します。
なお、2019年から会報冬号は電子版として刊行しております。

題名

筆者（五十音順）

グテールス国連事務局長さん、あの《原爆の図》の
丸木美術館を訪ねて下さい！

霧山 康二

宇陀三将の末裔たち

竹中 淑子

角砂糖

真夏のアイコン

ロシア侵攻に思う

竹本 祐子

船木 拓生

若林 滋

グテールス国連事務局長さん、あの『原爆の図』の丸木美術館を訪ねて下さい！

霧山 康二

東武東上線東松山駅から乗って郊外のバス停で降り、人家疎らな畑の夏のアスファルト道を

また暫く行きます。

夏ならば、道を左に折れ下草の深い林沿いの土の道を歩くとやがて工場棟の様な建物辺りで、オハグロがヒラヒラと何匹も飛んでいます。お齒黒トンボが出迎えていたのです。そこが丸木美術館です。

丸木伊里・俊の『原爆の図』3部作（幽霊）（火）（水）が誕生したのは1950年2月。都美術館。お二人の原点は「人が死んだことが辛い」と聞いています。

1945年3月・4月沖縄では30万人が戦没し、そして、45年8月6日広島30万人、更に9日長崎で20万人が米国トルーマンによる原爆投下で殺戮されたのです。ソ連で原爆、米国で水爆と核兵器開発が始まり、50年6月には朝鮮戦争勃発。又、1937年6月のスペインでのドイツ無差別爆撃における死と愛を描いたパブロ・ピカソの『ゲルニカ』―象徴としての絵画公開。

この第2次世界大戦或いは日本で云う15年戦争―昨日の惨禍と現実に苦しみ、近未来の惨禍

を予知しながらも、20世紀末まで希望を描いた画家丸木伊里・俊夫妻の《原爆の図》があります。貴方なら、世界の何処かで観て知っています。

この21世紀の初頭から10年にも亘り国連難民高等弁務官（UNHCR）を務め、平和と持続可能な開発・人権・人道援助の確保という国連の取り組みに、ウクライナばかりでなく、ウイグル／中国・ミャンマー・アフガニスタン・シリア問題に、口先や建前でなく本気で世界の人々に訴え・動員し実際に行動を起こしてきた貴方にお願ひしたいのです。米大統領や各国高官・元首脳が広島・長崎に来て形ばかりで何も動きません。

来年2023年5月には広島でG7サミットが開催されます。広島・長崎の原爆「資料館」見物も大事ですが、人の死と生を現実として描いた《原爆の図》を、各国7人首脳と、できればロシアも加え、東京の郊外都幾川沿いの丸木「原爆美術館」へ見に来てください（都心から車なら1時間です！）。

帰り、美術館を出たら、オハグロトンボがお

見送りするでしょう。被爆者の霊かも知れませんが。そして何かが変わるでしょう。

もう一つお願いするとすれば、広島が長崎に原爆「美術館」を造り丸木伊里・俊の《原爆の図》を常設展示することです―例えば旧太田川測の原爆ドームを生かして改築し、「原爆の図」移設展示するとか。

水墨の「原爆の図（火）」に涙する
この美術館にひとの声せず

きりやま・こうじ 1940年9月生まれ。

本名・加固康二。大連で5歳まで。終戦の年12月末、氷川丸で舞鶴港に引き揚げ。一橋大卒後40年間、公害防止・環境衛生施設建設事業。2011年7月シニア仲間と環境コンサル一般社団法人ASEEを立ち上げ。

その間、弟の絵画遺作集『hiroshiの絵』（スペース社）、エッセイ集『サルの視点』（文芸社）刊行。

宇陀三将の末裔たち

竹中 淑子

奈良県の宇陀^{うだ}菟田^{うた}野^のは
——国の始まりは大和^{やまと}の国、

郡^{ぐん}の始まりは宇陀郡

宇陀の始まりは菟田^{うた}野^のから——

とうたわれた所である。八咫^{やたがらす}鳥に導かれて神武天皇が大和の国に入ってきたのもこの菟田野といわれる。毎年秋には「みくまり祭り」があり、

後醍醐天皇が総社水分神社^{みくまり}に下賜された鳳輦神輿（国重要文化財）のレプリカなどが街をねり歩く。

時代が下って、戦国時代になると北畠家臣に宇陀三将と言われる秋山氏、澤氏、芳野^{ほうの}氏^のがいて、それぞれ秋山城、澤城、芳野城という山城をもっていた。

実はその一つ芳野城の城主が我が遠い先祖なのである。私の四代前の昌平黻儒官の芳野金陵が儒教の教えによるのか四代前、さらにその何代前をも調べてくれていた。下芳野の古刹勝林寺に残る既往録などの古い文献によるものだが、南北朝以来の芳野家の歴史を「家牒」という家書にして我々子孫に残してくれていた。

——傳に言ふ、南北分統の際、上祖某南朝に勤王す、其の講和に迫^{おま}り、同志七人と鬪を拝辞し、奔播流離、終に同に関東に來たり、跡を金野に没し、思む所有るを以て、其の名氏を没し、氏を芳野^{ほうの}に改む。蓋^{けだ}し其の本志を表はせるなり。凡そ近邑の同氏の者は、皆其の苗裔という。……………

この「家牒」を読んで先祖への興味が湧くと

宇陀菟田野への思いがにわかに募り、二度訪れることになった。二度目は芳野城の南北百メートルの城台が残るといふ城山の山頂に登るつもりであった。

城山は芳野川沿いにある杉でおおわれた低いこんもりとした山である。代々この山の木こりであったという地元の老人に案内を乞うた。一歩山に入ると杉の太木で日が入らず鬱蒼として暗い。進むにつれその暗闇になれた目に入るのが焼場あと、地藏尊、塞がれた井戸、土塁、切り落しなどどうもうす気味悪い。これが敵の侵入を防ぐ山城かと、タイム・スリップして古戦場に迷い込んだような錯覚になる。さらに登ると竹と熊笹の群生が加わる。頂上まであと一歩という所で堀切に出くわす。登山のいでたちではあったが足がすくみ、ここの突破は難しかろうと退散と相成った。

ところが数年前より、地元の『宇陀の神話と歴史を考える会』や『宇陀市観光協会』の方々の尽力で芳野城跡が整備された。私がかつて登頂を試み果たせなかった側の反対側からの道が作られ、今年城跡の石碑の除幕式が盛大に挙行

された。遠くロマンの地大和を見はるかす展望台では能の舞も披露された。

そこでは思いがけない隠れ芳野といわれる人達との遭遇があった。一方の私たちは織田、豊臣に追われ熊野海賊の力を借りて房総へ落ち延びた一族の末裔であり、片やもう一方は芳野の名氏を隠して残り住み今も宇陀、奈良に生きる末裔であった。

さらに、五年前に催された『宇陀三将サミット』では宇陀三将秋山氏、澤氏、芳野氏の末裔が一堂に会した。戦国の世に外に對しては興福寺や春日社の勢力拡大に相和して戦いもしたが、内では莊や郷の支配をめぐって互いに争いを繰り返しもした。ある研究者の講演では宇陀の三将が大和を離れることになったのは豊臣の勢力が及んで秋山城に秀吉直臣が入城したことも一因で、その後、秋山氏は徳川家康の旗本になり、澤氏は津藩藤堂に仕えたが、芳野氏の情報には不明ということであった。

五百年の歳月を経てその地での会遇。恩讐を越え、我ら末裔、何を懐い何を語らんである。そこで七言絶句を一首。

宇陀芳野城跡に過る

過宇陀芳野城跡

同志七人闕下を辞す

同志七人辭闕下

流離播越故城枯る

流離播越故城枯

往時の軍壘斑籜堆く

往時軍壘堆斑籜

吹断す風腥し苗裔の吾に

吹斷風腥苗裔吾

(註)同志七人…南朝の芳野七騎 闕下…宮中

流離播越…居場所を失い他国をさすらう

斑籜…まだらの竹の皮 苗裔…遠い子孫

たけなか・よしこ 福岡県生まれ。九州大学

理学部卒。慶應義塾大学名誉教授。理学博士。

裁錦会会員(雅号・玉理)主な著書に『数学か

らの7つのトピックス』『時有ってか尽きん』『漢

詩を詠む日々』『数学者の家』『遙かなる星漢』

など。

角砂糖

竹本

祐子

ちまたで、角砂糖を目にする機会が最近なくなつた。

昔の喫茶店には、各テーブルに角砂糖の入ったケースが置かれていた。運ばれてきたコーヒーカーップを前にして、おせっかいな人間は「砂糖、何個？」と聞く。そして相手のカップに言われた数だけ角砂糖を入れてやる。テレビドラ

マでもそんな場面があったものだ。相手に少しでも近づこうとする男の魂胆か、あるいは世話好きな性格をアピールしたい女のお節介か。

いまではスティック状の袋入りグラニュー糖が主流。自分で好きな量を入れて飲む。ウイルスの感染拡大を経験してからは、自分以外の人の飲み物にちょっかいを出すのはタブーとなった。

来客にコーヒーを出す際は、ブラックか、ミルクか砂糖がいるか、と好みを尋ねる。

「ブラックで」と言われると、砂糖もミルクも入れないコーヒー、と私は思っていた。

が、ある時、外国映画の中で、コーヒーの好みを訊かれて、“Black, with sugar”と応える男がいた。

つまり、ブラックとは、「ミルクは入れないで」という意味なのだ。色からしてまさに黒。

人種やお国柄によつては、砂糖をたっぷり入れて飲む習慣がある。アラビヤ人は、多めに砂糖を入れたコーヒーを飲む。コーヒー自体がものすごく濃くて苦みがあるからか。その典型トルココーヒーはコーヒーの粉と同量の砂糖を鍋

に入れ、水から煮立てるようにして淹れる。カップに注がれたら、粉が沈むのを待って、上澄みをすするように飲む。

ベトナムコーヒーはコンデンスミルクがはいった、かなりの甘さを伴うコーヒーである。

コーヒーに砂糖もミルクも入れずに飲むスタイルは、最近の日本人に特に好まれていそう。だ。そもそも日本人は緑茶を飲む習慣があり、茶葉の香りと味を楽しむように、コーヒーもまた、豆そのものの味だけでなく、ロースト加減から淹れ方を細やかに堪能する。そのためには、まずは砂糖もミルクも入れずに飲んだほうがよい。

アメリカ人が、グリーンティーを愛飲するのはよいが、緑茶に砂糖を入れて飲んでいる面に遭遇したことがある。紅茶と同じ感覚ということか。だとすると、砂糖もミルクも入れない日本流のブラックは、茶の湯の席であの抹茶の苦みを味わう日本人ならではの飲み方なのではないか。煎茶を飲む感覚で、コーヒーもまた何も入れずに味わって飲む。

角砂糖ひとつは3〜4グラム。グラニュー糖

と同じで、カロリーは一個あたり十一〜十六キロカロリー。角砂糖も三個以上いれると、かなりの甘党だろう。

日本人流のブラックコーヒーを飲む習慣が日常化している我が家で、昨年来、角砂糖をかかさず常備するようになった。その理由は…。

運動不足を補うために、毎日ウォーキングをすることにした。歩数計のアプリを入れたおかげで、目標歩数を歩かないと一日が終わった気がしない。せつせと歩数を稼ぐ毎日が、ありがたいことに健康をはぐくんでくれる。

雨降りもあれば、寒風吹きすさぶ日もある。それでも歩くようになったのは、たどり着く先に誰かが待っていてくれると思うと、がぜん張り切って歩けるようになった。

まるで逢瀬を重ねるように、待ち人に会いに行く日々が続いた。そのうちにお土産を持っていくとひらめいて、角砂糖を三個だけ持っていくことにした。

角砂糖を貢ぐ相手は、引退した競走馬。広々とした囲いのなかでのんびり暮らすサラブレッド。二十歳になる爺さん馬である。何度も通う

うちに、鼻づらを撫で、たてがみに触ることができ、角砂糖を手から食べてくれるようになった。田舎暮らしならではの、贅沢ですてきな出会い。

大きな長い顔に頬ずりすると、干し草を食べればかりの馬はまるでカモミールのような芳しい草の匂いがした。角砂糖三個と引き換えに、生きる鋭気をもらう。

たけもと・ゆうこ 昭和29年生まれ。現在長野県松本市在住。上智大学卒業後、英文翻訳をする傍ら、家業の造り酒屋を継ぎ、35年間会社を経営。その間、信濃毎日新聞の地元紙「松本平タウン情報」に21年間コラムを掲載。小説2冊、絵本2冊、エッセイ集『酒蔵と猫』を出版。2021年会社を退き、現在はフリーのエッセイスト。

真夏のイコン

船木 拓生

イコンを眺めてはどうして惹かれるのだろうか
と、いつも思いながら見てきた。素朴を超えた
妙な形態の派手な色調にもかかわらず、静穏な
安定として感受されるふしぎさだ。「それがイコ
ン」と受け容れてきた、そのふしぎの魅力につ
いてあらためて省みさせたのが、ロシアによる
ウクライナ侵攻である。

イコンは宗教画であり、それも祈り拝む対象だ。その宗教はギリシア正教系キリスト教。が、
よくに信仰心はなく、正教についてはイコンと
深く関わるらしいビザンチン文化同様に無知
だ。信仰心と無縁なところで、絵として惹かれ
ている。つまりはぼくにとって絵画の美なのだ
が、それは現今、周囲に満ちるアートとはかな
り違う。

イコンの画像は題材、描く対象が定まってお
り、その描き方も、色彩をふくめ決まっている
ようだ。製作にあたっては註文主として教会が
存在し、最初に題材、なにを描くかがあり、描
くのは専門の僧房だ。その製作形態は近代以前
の工房と同じにみえる。工房の職人は親方のも
と註文品の製作を重ねることによって技芸に熟
達する。製作品は衣食住と労働に必要な什器道
具類だが、そこに機能と装飾の美を見出し称揚
したのが「民芸」だった。

それは使用されることによって形成される美、
すなわち蓄積された民衆の生活が彫琢した美で
ある。イコンは教会のみならず民衆の自宅の壁
に掲げられて、毎日、祈りを捧げられる。日常

を送るにあたり必須の精神用聖具というわけだ。

これを描く行為は写経の写字生がそうであるような、先行お手本の模倣だろう。仏教でいう「儀軌」、儀式に近い描く行為であり、それが精神を律する修行であり勤行となる。そこに個性や独創を追求する意識はない。とはいえルブリヨフのように画僧個人の名とともに遺る名作がある。六〇〇年も前のアイコンだが、たしかにすばらしい。

アイコンに写実の要素、リアリズムはまったくない。母（マリア）に抱かれた幼児（イエス）は赤ん坊らしくない。形容困難な容貌だが、キリストの影像として生まれながらの聖を様式化したということだろうか。誇張ではない定型、画一化であり、それはマリアや聖人の顔もそう、容貌だけでなく、手足ほかすべてが線描によって限取られており、板人形のようにぎこちない。時間性の拒否、成長する身体の否定、非生命の表現スタイルか。遠近法とは無縁、立体表現という見方からすれば、岩山から建物（教会堂）および着衣聖人像など屈折線を用いた平面化とその構成法は独自のキュビズムを意図したごと

くだ。

こうした「儀軌」がどのような過程を経て、いつ定まったのか知らないが、その核心にアイコンを描くという作法による、与える効果をふくめた信仰経験の蓄積があったに違いない。その世代を越えた繰り返し主題にともなう形態や色彩の、抽象化ならぬ単純化を導くとともに光沢を深沈化させたと感じる。これがアイコン独創のシンボリズムを成立させている。

狭い戸口の奥まった薄暗い会堂内部をおおう、赤紅や金色に彩られた聖なる図像アイコンである。揺れる灯火とたなびく香煙を透して、あちこちに浮かぶ原色のキュビズムに遭遇すれば、迫り寄せる大きななかに受容されてのち、落着きを得るという心的体験となるのではない。聖別の厳しさが優しさとして包み込んで、堪え忍ぶ今を励ますような。

槍を手に竜と闘う白馬の騎士像のアイコンに信者は、聖をひたむきに求める姿勢を見るだろう。それはだれでもが内面に強化することのできる精神のしぶとさを啓示して、「我が生」をそのままで肯定させる。ここには争いを進歩、発展と

結合させるような価値意識はなく、戦いをあおるような姿勢もない。

数えてみれば五四年前の八月、その二一日の午後だったと思う、ぼくは汗にまみれながら行先も決めず坂道を歩き上っていた。下宿の暑く暗い三畳間から真夏の表へ出たのは、ソ連（ワルシャワ条約）軍がチェコスロバキアに侵攻したと知ったからだだった。（ぼくはドストエフスキーとマヤコフスキーを好んでいた）。噴き出した汗と足裏でべとつく溶けたアスファルトが心身に「今」を意識させた。当時、ロシア正教は政権の抑圧規制下にあった。

ぼくがアイコンに惹かれる素に、このとき滴らせた汗があるようだ。怒りをともなった不可解が烈しい太陽光と照射し合って、うつむく影が路面を黒く滲ませていた。ナイーブにして入り組んだ構成の画面が湛え滲ませるコハクのような輝きは、不可解を影として滲ませた汗と光に響振し、その路面の今につづくことを想起させるようだ。

ふなき・たくお 1947年、三河国岡崎市

の県営追進農場で生。70年、早稲田大学第二文学部ロシア文学科の廃止後最終で卒。ハ山本安英の会／公演、木下順二作『夕鶴』『子午線の祀り』等の制作に従事。著書『富士の気分』（西田書店）、『評伝・観世榮夫』（平凡社）、『俠氣の生態学』（ふねうま舎）他。

ロシア侵攻に思う

若林 滋

北方領土でロシアと国境を接する北海道に住む筆者は、破壊と殺戮のウクライナ侵攻以来、

日本は大丈夫かと心配している。

わが国が米欧に協調して経済制裁したのに対し、ロシアは日本を「非友好国」と断定、9月5日一方的にビザ無し交流と自由訪問の口合意を破棄した。ビザ無し交流は今年8月に死去したゴルバチョフ元ソ連大統領が1991年の訪日時に提案、92年から始まった。2020年に中止されるまで、日本の旧島民とロシア島民計延べ2万4488人が相互に往来した。自由訪問は99年に始まり、旧島民ら延べ5231人が訪問した。両事業が中止されたのはコロナ感染拡大のためで、合意破棄で再開の見込みは立たなくなった。

自由訪問と同様に行われてきた、旧島民の北方領土墓参は今回の破棄に含まれなかったが、旧島民団体は上陸して墓参するには不安がある

と、洋上慰霊祭に止めた。

振り返れば、旧ソ連は第2次大戦終盤に日ソ中立条約を破棄して対日参戦、45年8月終戦の詔が出された後も進撃を続け、9月5日までわが国固有領土の国後、択捉、歯舞、色丹を占領した。北海道の「島を返せ」運動に対しロ

シア側は「北方4島の領有は大戦の正当な結果だ」と一貫して主張し、取り付く島がない。

ロシアが第2次大戦終結の日とする今年9月3日、北方4島とサハリン州都ユジノサハリンスクで対日戦勝記念式典を開催した。リマレンコ州知事は挨拶で「この島々で対日戦最後の戦いが行われ、我々は軍国主義日本に勝利し、南沙ハリンとクリル諸島（千島列島と北方領土）が解放された」と強調した。道民は報道でこれを知り、失望を新たにした。

ロシアは9月1日から7日まで大規模軍事演習「ポストーク2022」を実施した。中国など13か国が参加し、サハリンと北方4島で上陸撃退演習を行った。りゅう弾砲やT80戦車が登場し、大戦の時ソ連軍に追われ北海道に逃げた旧島民たちは、演習のテレビに身震いしたという。演習場から北方領土を除外するよう、との日本の申し入れは無視された。

大規模演習に参加するロシアと中国の艦艇6隻が9月初め日本海で射撃演習のあと、宗谷海峡からオホーツク海に入り、北の国境にも緊張が走った。

防衛省は自衛隊と米海兵隊との日米共同演習を10月に北方領土を臨む別海町など道内7箇所を実施する、と発表した。自衛隊員2100人と米軍1400人が輸送機オスプレー、米国がウクライナに供与したのと同じロケット砲を駆使し、7箇所を島しよ部に見立てて人員と物資の輸送、射撃演習をする。日米安保体制上必要な演習だが、ロシアを刺激するのは避けられない。

根室沖貝殻島周辺のコンブ漁は6月から9月まで行われた。今年はロシア警備船の臨検が急増し、臨検された漁船は200隻余と昨年の2倍以上だった。幸い^だ拿捕は無かったが、若し違反容疑で拿捕されれば高額罰金や船の没収もあり得ることを知る漁民を恐怖させた。

道東沖の大型船のサンマ漁も8月下旬から始まった。漁場はロシアの排他的経済水域（EEZ）の東側の根室沖1400キロにある。EEZ内は原則として自由航行できるが、臨検が増え拿捕されては大変と漁船の大半は迂回した。

迂回すると燃料代が直進の1・3倍になる。折悪しく燃料の重油が昨年より20%値上がりし

た。漁師たちは「今年是不漁のうえ魚体が小さく、迂回で燃料がかさみ大赤字だ」と嘆く。北方領土返還や合意破棄の撤回など、日ソ交渉の積極的な取り組みが必要である。岸田外交への道民の期待は大きい。

わかばやし・しげる 1934年北海道生まれ。東北大卒。読売新聞入社、浜松支局長、編集局地方部長など歴任。著書に「昭和天皇の親代わり——鈴木貫太郎とたか夫人」「函館戦争再考」（中西出版）ほか。札幌市在住。

来年2月に依頼状を送

第71回日本エッセイスト・クラブ賞

候補作品ご推薦のお願い

来年度の第71回日本エッセイスト・クラブ賞の審査基準は下記のとおりです。本年4月1日から来年3月末日までに、初版として発行された単行本が対象です。来年2月に、会員および出版社に推薦願いをお送りしますので、候補作のご推薦をお願いします。

審査委員長は秋岡伸彦氏です。

今年度の日本エッセイスト・クラブ賞のご推薦は会員による推薦作品36点、出版社の推薦作品74点、個人応募8点、合計118点でした。

審査基準

一、2022年4月1日より、2023年3月31日までの間に、初版として刊行された書籍とする。

二、クラブの正会員（個人会員）の作品、および共同著作は原則として審査の対象としない。ただし、入会の翌年度から5年以内に発表した作品は審査の対象とする。

三、著者の国籍は問わないが、日本語で書かれたもの。（翻訳は不可）

四、新聞、雑誌等に掲載され、その後出版されたものでもよい。

五、他の類似の賞を最近受賞されている方、およびすでに文名を広く知られている方の作品は除く。

六、随想、評論、ノンフィクション、伝記、研究、ドキュメント、旅行記など、エッセーを広い範囲でとらえ、特に新鮮で感銘を覚える新人の発掘に努める。

第71回日本エッセイスト・クラブ賞
審査委員長 秋岡 伸彦

会員 近況

(順不同)



小学校で、ゲストティーチャーとして、初めて話をした。6年生を対象に、テーマは仕事の話。全戸配布のローカル紙に連載中のコラムを読んだ学校支援コーディネーターからの依頼を受けて、ボランティアで引き受けたもの。「どうして旅行作家になろうと思ったのですか?」「一番印象に残っている国はどこですか?」「どうしてこの仕事をしたいと思ったのですか?」「エッセイストって何ですか?」などの質問に、正直に、誠実に、答えた。(秋山 秀二)

卒寿になりました。ほぼ一世紀。いろいろの物が進化を遂げ、さまざまなことが起き、貴重な実体験をしてきました。私自身が歴史になった気分です。自家製本『年をとっても楽しい』を書きました。こんなこと

があったの、と驚いていたでもいいし、今を改めて感じていただいても嬉しい。好奇心さえあれば、心はいつまでも元気です。体のケアも加えて、もう少し頑張ります。もちろん、楽しみです。(岡 佳津子)

会員近況投稿のお願い

近況欄への投稿を歓迎いたします。エッセーや近況欄へのご感想などもお寄せください。字数は80字程度。

自 著 紹 介

『いつかある日』

穂莉正臣著

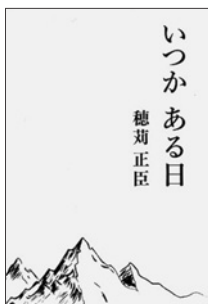
平成9年5月から平成29年冬号まで約20年間にわたり雑誌「医家芸

術」に、さらに最近のエッセーを加えて出版した。自分史のつもりで書いたが、今読み返してみると、多くの先輩や友人たちが亡くなり追悼集にも思える。「いつかある日」の題名は、終戦後に若者が「うたごえ喫茶」で唄った歌である。今から25年ほど前に故郷の糸魚川に行き、四人と食事をした。その中の一人が北アルプスに完全縦走の拇海(つがみ)新道と無料の山小屋をつくった山男で、その席で、この歌を唄った。低音で語るように唄う声に重みがあった。

(ウェイツ 1800円+税)

いつかある日

穂莉正臣



『転生 満州国皇帝・愛新覺羅家と
天皇家の昭和』

牧 久著



人はどこまで変わることができる
のだろうか？清朝最後の皇帝「宣統
帝」、満州国皇帝「康徳帝」、戦後は
ソ連に抑留後、戦犯として中国に送
還され、中国共産党の思想改造教育
を受けた後は北京市民として三つの
人生を生きた溥儀。しかし、熾烈な
文革の嵐は彼にも襲いかかる。

一方、日本の陸軍士官学校を優秀
な成績で卒業した弟の溥儀は嵯峨侯
爵家の娘・浩と結婚、終戦後に生き
別れになったものの、十六年後に奇
跡の再会を果たし、生涯愛し続けた。
日中両国の歴史に翻弄され続けた二
人の波乱の人生は、日中友好に大き
な役割を果たし、天皇ご夫妻（現上
皇ご夫妻）の訪中として結実する。

（小学館 3300円税込）

『学びほぐし』が会社を再生する
企業とファンドの組織変革物語』

安嶋 明著

同著は、事業再生ファンドによる
企業再生の実践記録である。同時に
巷にあふれるビジネス本に対するア
ンチテーゼ本でもある。著者は「組
織変革」において、どこでも通じる
万能のハウツーや課題を即座に解決
できるスーパーマン経営者は存在し
ないと主張する。その代わりに、社
員同士が「対話」を通じた「学習」

を継続しながら、互いの関係性を変
化させていくことによって、万年赤
字企業が徐々に変化していく実態を
丹念に描いている。ビジネス本とい
う以上に、教育学、社会学的な知見
に裏付けられた著作と言えよう。

（岩波書店 2000円＋税）



ご寄贈と自著紹介のお願い
刊行から概ね1年以内を目安
に、ご著書の紹介を事務局あてに
随時、郵送、FAX、メール等
で送稿ください。紹介の本文は著
者名、著書名は別にして、250
字程度。また本文とは別に出版
社・価格を付記願います。

新会員をご推薦ください 会員一名の推薦でも審査

当クラブの新会員をご推薦ください。クラブの一層の活性化をはかるべく、ぜひ新しい仲間たちを迎えたいと存じます。お知り合いなどで、会員にふさわしい方をご紹介くださるよう、皆さまのご協力をお願いします。

クラブ定款第7条にありますように、正会員となるには、現在の正会員2名以上の推薦を得て、理事会の承認を求めることになっています。

この「2名以上の推薦」という原則は変わりませんが、会員1名の推

薦でも、理事会に申請していただければ、審査の対象とします。理事会推薦によって、規約の要件は十分に満たすことができます。

エッセイストの意味合いについては、狭義の随筆や随想だけにとらわれず、評論、ノンフィクションなど幅広い分野を対象にしています。著書や新聞・雑誌などのお仕事を参考に、クラブの趣旨に即して、理事会で審査します。

11月現在の正会員は196名です。入会推薦の用紙などはクラブ事

務局に用意していますが、新型コロナ禍の影響で在宅勤務などもありますので、なるべく郵便かメールでご連絡ください。

なお、毎年のクラブ賞審査で、原則として正会員の作品は対象外ですが、入会の翌年から5年以内に発表した作品は対象になりますので、申し添えます。
(理事会)

新会員の紹介

横田 弘幸(よこた・ひろゆき)氏



エッセイスト、日本オペラ振興会評議員。
読売新聞事業局次長、読売日本

交響楽団理事長を歴任。著書に『ほろ酔いばなし 酒の『徒然草』』『ほろ酔いばなし 酒の日本文化史』『やさしい環境問題のはなし』など。千葉県在住。

正会員は現在 196名

事務局から

特別維持会費ご寄付のお礼

2022年9月から11月2日まで
に、次の会員からご寄付をいただきました。
ご芳志のほど、心からお礼
申し上げます。（順不同・敬称略）

特別維持会費

戸田 桂太	若林 滋
秋山 秀一	山本思外里
中村 龍介	竹本 祐子
藤原 作弥	今野 耕作
萬年 浩雄	太田 愛人
松田 宣子	降幡 賢一
秋田 博	穂苅 正臣
原田 國男	大高 英昭
堀尾眞紀子	堤 未果
戸田 淳子	河合 弘之
松本 仁一	桃井 恒和
深尾 凱子	野見山曉治
栗生 将信	古川 洽次

東畑 朝子	吉行 和子
田和 潤子	吉原 賢二
岸 恵子	大井 玄
森本 貞子	秋岡 伸彦
山室 寛之	畑 正憲
よしだみどり	脇 祐三
上野 誠	加固 康二
岩瀬 達哉	森脇 逸男
紺野 猷邦	砂原 和雄
大宅 映子	村尾 清一
並木きょう子	齋藤 健
森 武生	川田 志明
岡 佳津子	坂口 和子
谷村 鯛夢	蜷川 真夫

☆クラブ賞のご支援

昨年に引き続き、今年度もクラブ賞の賛助金として、日本みらいホールディングス株式会社（代表・安嶋明氏）から10万円のご寄付をいただきました。

会員からの寄贈著書

柳川時夫氏著『毎日新聞コラム「余録」選』
吉原賢二氏著『日本の歴史と個人の歴史』
穂苅正臣氏著『いつかある日』
谷村鯛夢氏著『俳句ちよつといい話』
岡佳津子氏著『年をとっても楽しい』（私家版）

（8月から11月まで）

健康保険組合事務所移転のお知らせ

当クラブは「文芸美術国民健康保険組合」に加盟しています。新住所と電話番号は次のとおりです。

・千代田区神田司町2-7-2

ミレーネ神田PREX4階

・電話03-6811-7293

なお、従来の加入申込書は2023年1月5日に終了し、以後は新様式での提出が必要です。新加入申込書はクラブ事務局に用意してありますが、詳しくは組合までお問い合わせください。

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目指す。目的とし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」

という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。
(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、

定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならない。

第4章 役員等

(員数)

第20条

当法人に次の役員を置く。

(1) 理事 15名以上25名以内

(2) 監事 2名以上

2

理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によって、理事の中から定める。

3

会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章 理事会

(権限)

第28条

理事会は、次の職務を行う。

(1) 当法人の業務執行の決定

(2) 理事の職務の執行の監督

(3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

第6章 計算 (略)

第7章 清算 (略)

第8章 附則 (略)

役員名簿

会長 遠藤利男

理事長 (空 席)

専務理事 秋岡伸彦

常務理事 栗田 亘

堀尾真紀子

高村 壽一
よしだみどり

中丸 美繪

理事 秋山 秀一

梅津時比古

戸田 桂太

内藤 啓子

原田 國男

藤原 作弥

降幡 賢一

松田 宣子

桃井 恒和

監事 大高 英昭

今野 耕作

事務局長(兼) 降幡 賢一

名誉会長 村尾 清一

*

*

*

会 員 名

(2022年11月末日現在 258名)

五十音順

あ行

阿川 佐和子	阿部 菜穂子	青木 賢児	秋尾 沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
足立 則夫	有馬 真喜子	五十嵐 佳子	井口 隆史	池内 紀昭
池谷 薫	伊野 啓三郎	飯塚 恆雄	飯塚 浩彦	市川 桃子
市田 隆文	猪熊 建夫	岩瀬 達哉	上田 篤	上野 創
上野 誠	白井 和恵	鶴飼 哲夫	内池 正名	内田 洋子
梅津 時比古	浦田 憲治	海老沢 小百合	榎本 好宏	遠藤 利男
小川 津根子	小倉 董子	小澤 秀雄	小曾 戸明子	尾崎 左永子
尾崎 俊介	及川 直志	大井 玄	大塚 義治	大岩 孝平
大城 浩詩	大平 常元	大高 英昭	大谷 克弥	大村 智
大宅 映子	太田 愛人	岡 佳津子	岡田 恵美子	奥山 俊宏

か行

加固 康二	加藤 恭子	加藤 貞仁	勝方 信一	金井 辰樹
金森 敦子	金子 光美	亀田 泰武	軽部 謙介	河合 弘之
川田 志明	川良 浩和	菅野 光公	城山 邦紀	儀同 保
菊澤 研一	岸 恵子	岸本 康	北村 行孝	久我 なつみ
久谷 與四郎	栗生 将信	栗田 亘	黒川 鍾信	小池 光
小池 英夫	小泉 清	小谷 瑞穂子	小林 和男	児島 宏子
後藤 秀機	今野 耕作	紺野 猷邦		

さ行

さだ まさし	佐々木 健一	佐々木 卓	佐々木 満里子	佐田 智子
佐藤 きむ	佐藤 幸子	佐橋 慶女	佐保田 芳訓	斎藤 勇
齋藤 健	齋藤 健次郎	齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子
坂本 政謙	坂本 弘道	澤口 たまみ	澤地 久枝	澤藤 範次郎
三宮 麻由子	志村 ふくみ	塩谷 靖子	下重 暁子	下村 満子
杉江 弘	杉田 定大	杉溪 一言	杉戸 大作	杉山 武子
鈴木 章一	鈴木 博	砂原 和雄		

た行

田中 トモミ	田中 伸尚	田中 秀一	田中 實	田沼 敦子
田谷 麗子	田和 潤子	高井 潔司	高木 徹	高階 経和

高島 肇久
武本 宏一
辻 由美
ドリアン助川
徳田 正幸

高村 壽一
谷地 快一
堤 未果
戸田 桂太
富永 孝子

竹内 一正
谷村 鯛夢
鶴ヶ谷真一
戸田 淳子
富山 和子

竹中 淑子
俵 万智
D・ゾベティ
鳥羽欽一郎
鳥海 修

竹本 祐子
柘野 健次
出久根達郎
東畑 朝子

な行

内藤 啓子
中村 史郎
長井 好弘
並木きょう子
野見山曉治

中島さおり
中村登紀夫
長田 亮一
二宮 正之

中野 利子
中村 政雄
長友佐波子
蜷川 真夫

中名生正昭
中村 龍介
長野 安恒
縫田 曄子

中丸 美繪
中山 士朗
長屋 龍人
野中 康行

は行

長谷部 剛
濱邊 祐一
廣野 眞一
藤原 勇彦
降幡 賢一
堀尾眞紀子

葉山美知子
原 彬久
深尾 凱子
藤原 作弥
古川 洽次

羽中田 昌
原田 國男
福田 章
藤原 房子
古川 浩

畑 正憲
林 望
福田はるか
藤原 正彦
穂苅 正臣

畠山 重篤
樋口 恵子
福原 義春
船木 拓生
細川 俊夫

ま行

前田 晃伸
又吉 國雄
萬年 浩雄
宮本 倫好
森 孝之
森脇 逸男

前田 浩智
町田 邦雄
三島 利徳
村尾 清一
森 武生

牧 久
松田 宣子
水谷 亨
望月 照彦
森 哲志

牧村健一郎
松本 仁一
道脇 弘俊
桃井 恒和
森本 貞子

正籬 聡
松本 俊彦
南 砂
森 小夜子
森本 雍子

や行

八百板洋子
柳澤 桂子
山口 寿一
山本 一生
横山 昭作

八木 美雄
柳川 時夫
山口 伸美
山本思外里
吉岡 純子

安嶋 明
柳田由紀子
山下 健
よしだみどり
吉野源太郎

柳生 尚志
山川 静夫
山藤 章二
養老 孟司
吉原 賢二

柳澤嘉一郎
山形 孝夫
山室 寛之
横田 弘幸
吉行 和子

わ行

若林

滋

脇

祐三

渡辺 綱纜

渡辺美佐子

渡邊 満子

法人会員（順不同）

朝日新聞社

岩波書店

毎日新聞社

講談社

読売新聞社

集英社

産業経済新聞社

日本経済新聞社

中日新聞社

共同通信社

日本放送協会

TBS テレビ

日本エッセイスト・クラブ事務局



会報 2022 冬 (No. 74 | II)

2022年11月25日 発行

発行人 遠藤利男

発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋 1—18—2

明宏ビル別館6階 T105-0004

電話 03(3502)7287

$$\begin{array}{r} \text{F} \\ \text{A} \\ \text{X} \end{array} \begin{array}{r} 0 \\ 3 \\ 3 \\ 5 \\ 0 \\ 2 \end{array} \begin{array}{r} 7 \\ 2 \\ 8 \\ 8 \end{array}$$

ホームぺージ <http://essayistclub.jp/>

Eメール info@essayistclub.jp印刷所
(株)TBSグロウディア

ne
CLUB